【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】（小学校用）

都道府県名	千葉県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	千葉県富津市立青堀小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	3	3	3	3	4	知１言１	２２	３３
児童数	121	89	112	109	103	117	(7)	651	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

基礎学力の確かな定着と向上をめざして
ー算数科における少人数習熟度別編成指導を中心にしてー

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

○２年生～６年生：算数
指導内容の習得・定着に差異が出る学年、教科であるため。
○３年生～６年生：教科担任制
生徒指導上からも複数の教師で児童を見守る必要のある学年であるため。
３年生・・・理科、音楽、体育、図工
４年生・・・書写、社会、理科
５年生・・・書写、社会、理科、家庭科
６年生・・・書写、社会、理科、体育、図工、家庭科

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

○　テーマ

基礎学力の確かな定着と向上をめざして
ー算数科における少人数習熟度別編成指導を中心にしてー

○　研究の見通し（仮説）

仮説１
少人数習熟度別編成や教科担任制により、子どもにとって「わかる授業のあり方」を工夫すれば、基礎学力の定着がはかれるであろう。

仮説２
ドリル学習の日常化と個に即したドリルの開発と実施により学力定着をはかり、指導法を明らかにすれば、子ども達一人一人の学力を引き上げることが可能であろう。

○　研究の内容・方法
（１）少人数習熟度別編成や教科担任制により、児童にとって「わかる授

業」を検証する。

○　算数科の学習において、２年生は３学級編成を４クラスに、３年生～６年生は３学級編成及び４学級編成を５クラスに分け、少人数編成にして授業を展開する方法で検証する。

○教科担任制の対象は３年生～６年生とし、教科はそれぞれの学年で決定する。
教師の得意分野を生かせば、子ども達にとって「楽しくわかる授業」になるばかりでなく、教師にとってもまた、よりよい教材と指導内容の深化につなげられる。さらに、複数の教師で子ども達を見守り、子ども達のよさや指導すべき点を明らかにすることができる。

平成16年度

○　テーマ

基礎学力の確かな定着と向上をめざして
ー算数科における少人数編成指導を中心にしてー

○　研究の見通し

仮説１
少人数編成のあり方や単元指導計画の工夫をし、子どもにとって「わかる授業のあり方」を探求していくことにより、基礎学力の定着がはかれるであろ。

仮説２
ドリル学習の日常化と個に応じた学習指導のあり方を確立していけば、子ども達一人一人の学力を引き上げることが可能であろう。

○　研究の内容・方法

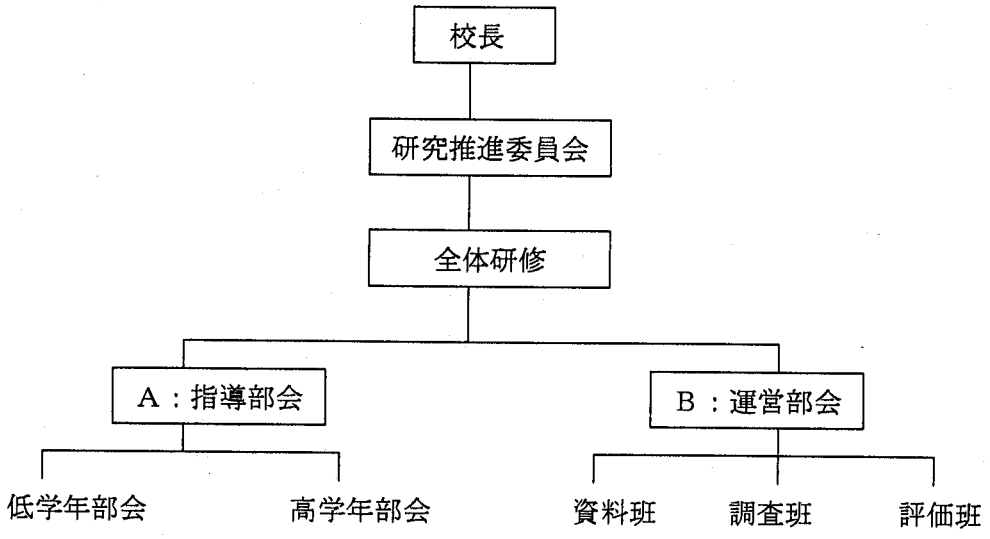
（１）少人数編成指導や教科担任制により、児童にとって「わかる授業のあり方」を検証する。
①算数科の学習において、少人数編成指導にして（習熟度別編成指導を含む）、編成のあり方に柔軟性を持たせ工夫しながら、授業を展開する方法で検証する。併せて、個に応じた学習のあり方を検証していく。
②教科担任制の対象は３～６年とし、教科は教師の得意分野を生かしそれぞれの学年で決定する。

（２）ドリル学習の日常化を図り、指導法との関連を明らかにする。
（全学年で実施する。実施教科は算数と国語とする。）
また、基礎学力が極端に不十分な児童については、教材や指導法を工夫しながら、基礎ドリル学習を継続していく。

（３）評価によって、客観的に診断していく。
①標準的・客観的テスト等の実施により、学力向上を診断する。
②児童の意識調査及び保護者への説明とアンケートの実施による評価を行う。
③平成１５年度からの２年間の継続的な評価を比較し、定着と向上を診断していく。

(3)　研究推進体制

○研究組織　　研究部会をＡ．Ｂの２部構成とし、指導法と運営とを充実させていく。



Ａ：指導部会
① 低学年部会　１～３年＋少人数指導担当者１＋学年付き担当者
② 高学年部会　４～６年＋少人数指導担当者１＋学年付き担当者

Ｂ：運営部会
① 資料班（ドリルの開発・備品教具の選定等）
② 調査班（全校意識調査と集計処理）
③ 評価班（学力診断テストの検討と運営・評価カードの作成）

○研究授業
・学年年２回の研究授業を展開し、指導法の工夫と改善をはかる。
・個々の教師の指導技術の向上のために、一人１回の自主公開授業を展開する。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○各単元における少人数指導と習熟度別指導の扱いについてを以下の点を確認したことにより、指導の重点、指導の方法が担当教師に共通理解され、実際の指導に生かされるようになった。
①各単元における少人数指導と習熟度別指導の扱い
少人数指導・・・その単元において既習となる要素等の理解度に個人差があまり出ない単元は、ＮＲＴ学力診断テストによるクラス編成や本来の学級単位で実施する。
（例）３年「表とグラフ」、４年「三角形」、６年「比例」
習熟度別指導・・既習となる積み重ねが基礎となり、理解をしていることが学習を進める上でかなりのウエイトを占め、個人差が見られる単元において実施する。
（例）２年「かけ算」、３年「かけ算の筆算」
４年「わり算の筆算」
５年「小数のかけ算・わり算」「割合」
６年「分数のかけ算・わり算」
②各クラスのねらい

チャレンジ・・・既習から自分の考えを導き出し、進んで思考して課題に取り組める。適用題に発展的な問題を積極的に扱う。解法の手だてとなるものをいくつかの方法で説明できる。

アタック・・・・自分の考えが持てるように、問題解決をする時間を多く取り、基礎的な問題を繰り返し練習させ、学力の定着をはかる。

マスター・・・・じっくり復習しながら、その単元の重要なポイントを時間をかけて学習する。扱う問題に児童の実態を配慮しながら進める。

○前提テストの分析により、単元によっては、
①マスタークラスをＴＴ指導にする。
②単元の指導の途中で定着度確認テストをし、クラスを再編成し直す。
など、少人数編成の仕方に流動性が出てきて、より実態に合わせた指導がなされ、個々の児童に目が届くようになってきた。

○習熟度別編成により、児童の実態に合わせた各クラスの単元指導計画、指導方法を工夫できるようになり、指導の重点に合わせた時数配分をしたため、児童の能力に応じた学習を組むことができた。

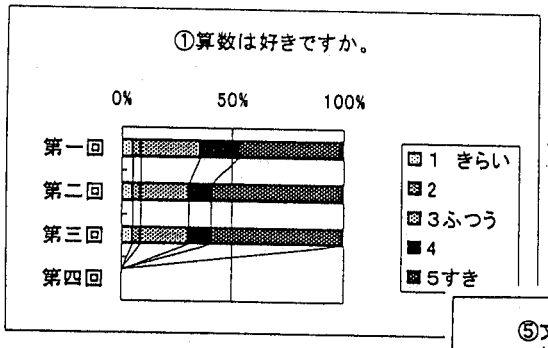
○課題別選択学習を取り入れることにより、児童に自ら課題を決めさせ、つまずきを解決する方法を取ることにより、児童の意欲を高めたり理解を深めたりすることができた。

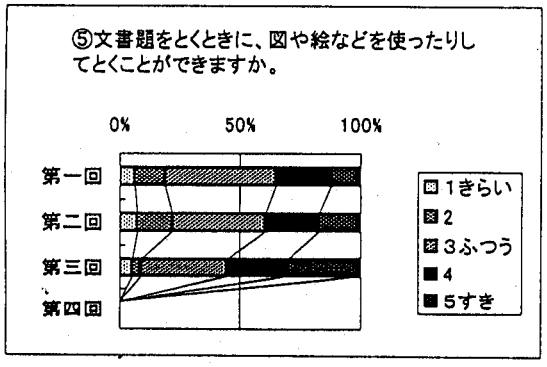
○習熟度クラス編成をし、各クラスのねらいを児童に知らせることにより、自分がどんながんばりをすればよいのかが児童に理解され始め、一部の児童は次の学習に向けて家庭学習をするようになってきた。

○これまで学習意欲に欠けていたマスタークラスの児童に意欲が出てきた。これは全体のレベルを底上げすることになっている。

○課題解決学習を進めることにより、児童は自力解決の場で自分なりの考えをしっかり持てるようになってきた。また、各学年とも考え方をノートに書いたり、みんなに説明したりすることを億劫がらずにできるようになっている。

〈全校意識調査結果〉　第１回調査４月・第２回調査７月・第３回調査１２月





２．今後の課題

○児童の実態の把握について
①前提テストの問題作成には、何を明らかにするのかをより明確にしていくための吟味が必要である。
②前提テストをどう生かしていくか。
正答率のみに着目するのではなく、間違いの傾向や原因、つまずきの把握をより細やかに分析していく必要がある。

○習熟度別指導のクラス編成について
①現時点では、到達した点数によってクラス編成をしているが、点数重視では理解度を正しく把握したとは言えない。つまずきの原因を分析し、それに即したクラス編成がなされるような真の「習熟度編成」をしていく必要がある。
②限られた指導者で有効な指導を確立していくためには、クラスの人数、指導者の配置の工夫をこれまで以上に検討していく必要がある。
③単元ごとにクラスを入れ替えることだけで成果が生まれるとは限らない。
低学年には負担も出ている。
④チャレンジクラスで安心してしまったり、マスタークラスで意欲を失ってしまったりする児童が存在することも現実である。チャレンジからアタックへ、マスターからアタックへなど、さらに流動的に途中移動させるなどの刺激を与えて意欲を持たせたい。

○単元の指導計画について
①指導計画にはより弾力性を持たせ、状況に応じて自由に活用できる時間を設定していくことが望まれる。単元のどこが重要かを見極め、必要に応じて補充・発展をさせる工夫が必要である。
②発展教材をどこまで導入していくか。個々に任せるのではなく、学校としての見解を出し、指導計画を作成していくことが必須である。
③定着しきれていない児童への指導時間の確保をどのように生み出すか。

○一時間単位の授業のあり方について
①児童の思考力を高めていく学習指導の工夫を考慮していく必要がある。
②児童の表現力の向上のために、まず正確さやていねいさなどのノート指導が必須である。

○ドリル学習の取り組みについて
①授業ではいったん理解するものの、ドリル不足で定着度が低いことがある。
ドリル不足をどう解消していくか。
②ドリル学習へどのように取り組んでいくのか。教師の指導の意識を再確認していくことも重要である。ただ、やらせていたのでは「間違いの練習」でしかない。ポイントは何かをわからせていくなど、成果を上げる工夫、個々の学習へのチェックを細やかするなどして、成就感を味わわせることをねらいたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○ＮＲＴ学力診断テストの実施と考察および活用
①平成１５年５月・・・前学年のテストを実施
１学期・・個人評価カードの作成
ＮＲＴ学力診断テストの活用法を検討し、これを少人数編成に活用する。また、結果から「思考力」を高めていくことが必要であることがはっきりとしたため一時間の学習過程の中に、必ず、「自力解決の場」を設定し、課題解決学習を主にしていくことを確認した。
②平成１６年３月・・・ＮＲＴ学力診断テストの実施と考察
前年度との比較をして考察・診断をしていく。

○千葉県学力テストの実施と考察

①平成１５年２月実施・考察
②平成１６年２月実施・考察　前年度との比較・分析をしていく。

○事前テストと事後テストの実施
各単元ごとに、単元のはじめと終末に実施し、到達度を把握していく。

○自己評価カードの活用
一時間ごとに児童に評価させ、本時の学習が理解できたかどうかを把握していく。

○個人評価カードの活用
その単元の各クラス担当者が、児童の個人カードに到達度を記入していくことにより、個々の学習の定着度がだれにでもわかるようにしていく。

○全校児童意識調査の実施と集計・考察
学期ごとにアンケートを実施し、児童の関心意欲等の変化を考察していく。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成１５年度は、特に普及活動はしていない。
平成１６年度１１月頃、公開研究会を予定している。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　□１３～１８学級　☑１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　☑一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無